

文明の危機と近代スピリチュアリズム

佐藤 明雄

はじめに

(1)

本稿は、筆者が本紀要で発表した最近の2つの論文、『ロゴス文明の自壊とカオスの復権』（甲南大学紀要 文学編 No 161 2011年3月）及び、『愛という名の量子論的ネットナビ』（同 No 164 2014年3月）を補足し完結するものである。

筆者の関心は、青年時代から一貫して変わらず、深刻化する人類文明の危機的状況の分析と、その危機回避の方途の模索にある。危機の淵源を遡れば、我われ人類が文明進歩の“希望の星”としたロゴス文明、すなわちデカルト・ニュートンの学問と科学にいたり、これを指摘、精査したものが第1の論文である。

続く第2の論文は、こうした人間の皮相なる文明の発展にも関わらず、宇宙進化の原理は「愛」にあること、従って危機回避の余地がなお残されていることを、量子論の立場から解明せんとした試論であった。

しかし、文明の危機の進捗状況は、終末時計が今や「人類破滅3分前！」を示すごとく、21世紀に入り一層悪化の一途をたどり、焦眉の急を告げている状況の中で、本稿第3の論文執筆となった。

危機は、ロゴス文明が特徴とする、分離・分断・対立の手法が、「部分真理」の更なる細分化を進め、学問科学のみならず、国家や社会体制、民族、部族や宗教にまで及ぼした結果である。その危機的状況は、既に100年以上も前から、具眼の思想家、哲学者、作家などの警告するところで、世界は2度の世界大戦を体験したにもかかわらず、依然として事態の改善は見られない。

文明の危機回避は、最早いかなる「地上原理」の弄策をもってしても叶うことではなく、筆者は、哲学本来の使命たる「全体真理」の開示は、「天上の原理」、すなわち心霊と霊界研究に求める他なきと悟った。本稿はこれに量子論的解釈を加えることで、地上と天上を結ぶ「全体真理」の一端を示すものである。

田辺元の晩年の著作である『メメント・モリ』は、本来ハイデッガーの七〇歳記念論文集への寄稿文『生の存在学か死の弁証法か』を受けて、その内容を簡潔に纏めたものであり、ハイデッガーとの思想的対決、さらには西洋の生の哲学に対する、東洋の死の哲学の立場を鮮明にしたものである。

田辺がこの論文の冒頭において、旧約聖書の「詩篇」に由来する「死を忘れるな」の警句を引いたのは、まかり間違えば明日の生存も期しがたい、今日の核文明の時代にこそ、この言葉が顧みられるべきであるが、世の現状はその反対に、むしろ死を忘れて生を楽しまんとする、風潮にあることを指摘する。

その背景にあるのは、ルネッサンス以降の生の解放であり、そして生の自由なる享楽拡張のための科学文明であった。しかし「生の立場の世界観」は、科学技術自らの所産である核兵器の産出によって裏切られ、長く価値の原理とされた「生」が、自らを「死」の手に引き渡しかねない状況になったのである。

すなわち、「生の哲学」が、その所産である科学技術によって否定されるという自己矛盾に陥り、破綻してしまっただけでなく、改めて「死を忘れるな」の戒告に従って、新しい「死の哲学」が求められることになった。

しかし、西洋哲学には歴史的伝統から「死の哲学」の発想が乏しく、西洋に「死の哲学」を求めることは困難であり、もしそれを求めるとするならば、東洋の知恵である「禅道」を措いては他にない、と田辺は説く。そして『碧巖集』の「道吾一家弔意」なる公案を引いて、彼自身の死の哲学を展開するのである。

すなわち、ある若年の僧が師に従って不幸のあった一檀家を訪れた時、棺を叩いて「生か死か」と問うが、師は唯「生とも道じ、死とも道じ」を繰り返すのみで弟子の問いに答えようとはしない。もし生であれば弔意に及ばず、またもし死であれば弔意も通ずることがない、この二律背反の解を、師は弟子自身に委ねたの

である。その帰途においても、同じ問答が繰り返されるが、師は答えない。師の死後、兄弟子に同じ問いを発しても同じ問答になる。

その意味する所は、生と死は互いに両立し得ぬものであり、単純にこれを生か死かと判定できるものでもない。「両者を不可分離の連関において自覚するものに対してのみ、その問いが意味を有することを悟るべきである」。そのことを当人自らに悟らしめるために「生ともいわじ死ともいわじ」と言い続けたのである、と田辺は哲学の立場から注解を加える。

若年の弟子ならずとも、生死はひとの最大の関心事である。されば、師に問い詰めてでもその答えを聞き出したものを、師はその答えを拒否し続けた。以来1000年後の現代において、田辺も「言わじ言わじ」をもって「死の哲学」への応答とするのである。同じく言うならば、「我の生きている限り死はなく、我に死が来たときは我はおらず、所詮、死は我に無縁のもの」とした、古代ギリシャの先哲の方が明快と言えるが、どうであろうか。

禅の公案とはおおよそこの様な問答の内容であるが、禅僧ならぬ哲学者・田辺元が「死の哲学」という以上は、言葉を惜しまず「知識と学」の立場から、その思索の披瀝がなされることを期待した筆者ではある。

生死こそは、本来人間にとり最も身近で、万人に関わる問題である。それがかくも不透明かつ没論理、その真理はいわば密室のなか、師と弟子の間に秘儀的に相伝され、余人の関与を許さぬものとなっている。「隻手の声」を聴く者は、相い拍つ隻手を秘めた者に限られるのであろうか。

(2)

現代世界が田辺の指摘するように「死の時代」と言われる状況にあることは論を待たない。1947年以降、アメリカの科学雑誌が権威ある科学者たちの意見をもとに発表する終末時計の最新の表示は、「地球人類の破滅3分前！」を示しているが、10数カ国が16,000発を超す核兵器を常備し、臨戦に備える世界の状況を考えれば当然であろう。

核兵器や大量破壊兵器の片鱗もなかった200年前、カントはすでにこの文明が将来「輝かしき悲惨」を生むと警告し、また160年前にはボードレーは「世界は没落に近づいている。しかも我われは〈それによって生きていると信じたもの〉によって破滅する」と記した。文明の開化とともに産業や商業が隆盛に向かい、

進歩と繁栄への楽観が流行する一方で、ゲーテ、ボードレー、フローベル、キルケゴール、ドストエフスキー、ニーチェ、トルストイなどの具眼の思想家、哲学者、詩人たちは挙って、文明の破綻と世界の終末の近いことに警鐘を鳴らしていた。

そして世界は、1914年から1945年の30年の間に2度も世界大戦を起こして、数千万人の犠牲者を生み、また現代科学の粹ともいべき原子物理学は、核兵器の製造と使用をもって、カントの予言通りの“輝かしき悲惨”の実行を果たした。しかも1945年以降の70年間も、世界での地域戦争は一日として止むことはなく、本稿執筆の現時点、新たなる「イスラム国」によるテロの恐怖が、世界を捲き込んでいる現状である。

また、世界の富豪80人が、世界の富の50%を占有し、米国では1%が国富の35%を占有する一方、25億人が一日1ドルの生活を余儀なくされ、貧困地域では6秒に一人の割で乳幼児が死亡し、また食糧、水、医薬品の不足によって多くの命が失なわれていて、文明の進歩が人類の平和と幸福に寄与していることとは程遠い現実である。

その他、核兵器や大量破壊兵器の開発と拡散、世界の軍備費の増大、武器輸出産業の拡大、民族・部族・種族間、宗教・宗派間の紛争、原理主義の拡大とテロの脅威、領土紛争、石油・エネルギー等資源の争奪、自然破壊と環境汚染、水資源の不足、温暖化と気候変動、生態系と環境の破壊、自然災害の巨大化、格差の拡大、麻薬汚染、各レベルにおけるモラルと価値観の崩壊、エボラ出血熱などパンデミック疫病の蔓延等々……。以上は、人間文明の生み出した「負の遺産」の目録表であるが、紛れもなく「死の時代」と言う名にふさわしい「診断症状」である。

世界が置かれているこの様な状況を打開するに、果たして「言わじ言わじ」の公案解釈ごときで、解決の糸口になるのであろうか。

(3)

西洋の「死の時代」は19世紀に突如現れたものではない。それ以前に「不安と絶望の時代」は密やかに人々の心に忍び寄っていた。哲学者キルケゴールは『不安の概念』(1844)と『死に至る病』(1848)において人々の心を蝕む不安と絶望を綿密に分析し、画家ムンクはその不安を「叫び」(1893)と題された絵画に表し、ニーチェは「神の死とニヒリズム宣言」によって、こ

れを決定的なものにした。

では世界が文明開化を遂げゆく一方で、かくも悲観的風潮に覆われるに至った背景には何があったのか。それは詰まるところ、人類の輿望を担って登場した「ロゴス文明」が招いた結果と言わざるを得ないであろう。

デカルト・ニュートン的な機械論的思考パラダイムは、自然科学、社会科学、人文科学を問わずすべての学問に浸潤し、「世界の魔法と魔術からの解放」を果たす一方、自然から生命と精霊を奪い、人間と社会を自動機械とその工場と化し、遂にはニーチェの言葉どおり、神をも抹殺してしまった。

フランシス・ベーコンは、自然を人間が恣意のままに寡奪利用できる対象とし、ホッブスは人間社会が「万人の万人に対する闘争の場」との前提で、専制君主への絶対服従の法制社会をつくり、アダム・スミスはそれまで悪徳と見做された「利己心」を「私悪は公益」とばかりに、社会の経済活動の起動力、牽引力として是認する資本主義経済をつくり、ダーウインの唯物的進化論は、「最適者生存」の理論をもって、弱肉強食の社会を裏から支えた。さらにフロイド心理学は、人間を「リビド」と称する性衝動のエネルギーの塊と理解することで、こころの領域からも、宗教的・倫理的要素を排除したのである。

人びとが長く、教養と知識によって、道義を深め人格を陶冶するものと信じた学問がなしてきたことは、万力のちからでもって、人びとから道義と徳性を奪い、脱道徳、没価値化へと絞り上げていったことである。その証しの一つが「小さな親切を！」なる、最高学府の卒業式における学長式辞であった。いわば学に対する最大の侮辱であることの意味を、学長も世の学者も理解せず、社会はこれに喝采して社会運動となした。かつて、「知識によって人格・道義を陶冶し、広く社会に貢献できる人材の育成」をする、と期待した学問は、変質し極めて危険な道具と化していたが、それに気づく識者はいなかったのである。

さらに近代は人びとが渴望した「自由」も得させた。しかもその自由は、かつてフランス大革命時代に掲げられた「自由・平等・博愛」の、あの自由ではない。人生に目的や意味を見失った人間自身に代わって、その座を占めるほどに極大化された実存的自由である。その放棄はもちろん、そこからの脱出も許されない自由であり、この状況をJ.P.サルトルはいみじくも「人間は“自由”に処刑されている」と表現した。レバノンの詩人カール・ジブランの言う「最強の軛と

足枷としての自由」である。自由は、人間が嬉々として奴隷のごとく、己の前にひれ伏すのを見たのである。

第1次世界大戦後の思想的混迷の中、このような状況をドイツの社会学者マックス・ウエーバーは、講演『職業としての学問』（1919）において見事に総括した。彼は学問と科学の最大の功績を、「世界の神秘と魔法からの解放」とし、「学問は宗教や道徳の問題とは一切無縁で、神の存在の有無、人生の意味や目的などに答えるものではない」と明言し、人々が学問知識に期待した、信仰や愛や善意の役割を否定して、これを全ての公の舞台から退場させた。

彼ほどの碩学にして、その学問科学こそが将来、ニヒリズム助長の主犯になることを見抜けなかったのか、それについての言及はない。なによりも近代科学は、中世の暗黒時代を抜けたルネッサンス期の西洋において、人間主義勃興の旗印のもとに、教会からの独立と、「世界の魔術からの解放」を願う人びとの輿望を担って登場した“希望の星”であったのである。たとえその行き着く先に「絶望と死の時代」が待ち受けているとしても、ウエーバーはそれを「合理化、主知化時代の宿命である」として、冷たく突き放すのである。

(4)

このマックス・ウエーバーの講演後20年を経て、文明の未来を真摯に憂える哲学者アンリ・ベルクソンは、その最後の著作『道徳と宗教の二源泉』（1939）の末尾において、「人類は自らのなした進歩の重みに、半ば押し潰され呻吟しつつありながら、自らの未来が自らの手にあることさえ十分に判っていない。人類はまず何よりも、自らが生き続けることを欲するか否か、を考えてみるべきである」と問いかけている。“to be or not to be”は、個人ならぬ人類の、人類自身への問いである、と主張するものである。

核兵器はおろか、上記の「文明の負の遺産」の片鱗さえ露わでなかった時代に、ベルクソンは、断崖に向かって進む人類の姿を見るかの如く、その未来についてかくもペシミスティックな考えを抱いていた。

しかも興味深いのは、彼がこの危機の克服に、意外にも「心霊科学」の研究の必要性を強調している点である。ベルクソンは、かねて「心霊現象」への関心が深く、1882年に設立された「英国心霊科学協会」に名を連ね、1913年にはその会長にも選出された。その時の記念講演の標題は、『生者の幽霊と心霊研究』で、

その内容は当時の学界や知識人にはタブーとされた、幽霊、生霊、心霊から、霊界の存在にまで及び、科学者に向けても、唯物的、物質的世界の研究に止まらず、心霊や霊界研究に向かうべきことを勧めたものであった。

「もし人が霊界の真実を知れば、これ程に快樂に執着することはなく、たとえ種々の快樂が存続するにせよ、それは朝日の光に薄れていく電灯のごとく、光輝く歡喜 (joie) によって覆い隠されることだろう」と述べる。

ベルクソンにも、今ある文明の危機を救うには、もはや在来のいかなる学問、宗教、道徳をもってしても及ばず、「天上の原理」を、心霊・霊界の研究に頼るのほかないとの認識があったのであろう。しかし当時の思想界、学会にはその発言を聴く耳はなく100年が過ぎた。

ベルクソンがかくまでも主張する心霊研究必須の背景は何であったのか。それは、近代の物質科学や唯物思想が、相次ぎ神と人間、自然と人間の間隔を断ちきり、ダーウインの進化論やラ・メトリの人間機械論のごとく、人間の霊性を否定し、それがいかに人々の心に不安と絶望を募らせ、彼らをニヒリズムの虜にさせてしまっているか。戦争、紛争、革命も、享樂的風潮もがそのことの証しである。「魂の永生」や「彼岸の生」の希望と確信を、心霊世界の実在証明によって見出すならば、必ずや人びとに価値観の転換をもたらして、この世の快樂などに、かくまでも執着させることはあり得ない、と考えたのである。

これを今日21世紀の世界に照らして考えれば、その状況たるや当時の比ではないが、20世紀の初頭においてすでに、ベルクソンは当時の世界の快樂狂奔の姿をこの様に慨嘆失望し、しかも、その克服をキリスト教信仰や、旧来の道徳説の鼓舞や啓発に求めたのではなく、心霊・霊界の研究に期待したのである。

(5)

唯物論的科学のもたらす虚無感が、現世享樂とニヒリズムを助長するのは当然である。それが教育と情報の伝播によって、西洋世界のみならず広く世界共有のものとなる、これが近代から現代にいたる世界頹落の図式であった。

物質文明の進歩によって経済や交通、通信、教育が発展し、社会が豊かに便利になる一方、神への畏敬や

自然の尊重の思いは消えて、人生の意味や善悪の価値観も相対化され、自ずから道徳秩序の崩壊が進む。かつて人びとの心を占めていた、感謝や愛という自然な感情も薄れ、国家も個人も自由競争の原理のもとで、ただひたすら、物質的欲望と快樂の拡大充足に駆られ、これにあらゆる学問と科学技術が協力することとなる。

そして、いつかは必ず到来する「死」への恐怖を一瞬でも、少しでも長く忘却すること、これが人々をして、他愛なき娛樂や演芸やスポーツ、観光や過度の物欲、金銭欲、食欲、性欲へと駆り立て、さらにその快樂増幅のための麻薬や薬物の蔓延となる。その一見して生の充実にも見える社会の活性が、実は、人々の心の底に潜む、生への不安と憂慮の証しなのである。

特に英国をはじめ、ヨーロッパの、キリスト教先進諸国のエネルギーは、アフリカ、南米、アジア各地での植民地獲得競争に向けられ、奴隷売買を含め、非人間的行為の限りを尽くしたが、これに対しても、パチカン法王庁をはじめキリスト教会からの批判や非難の声は全く聞かれなかった。

そして現代は、経済・産業・商業の大勢はグローバル化の中、経済成長を錦のみ旗にして、「大量生産、大量消費、大量廃棄」のシステムのもと、誇大な広告、情宣によって人びとのバーチャルな欲望を刺激し、同時に資源の消費と自然破壊に拍車をかける。

自然が命も心も意味も持たない機械的存在となれば、畏敬や親しみの対象ではなくなり、フランシス・ベーコンの「知は力なり」のモットー通り、人間の飽くなき欲望充足のための、征服と収奪と利用の対象でしかなくなる。現代人間による自然破壊の許可書は、既に400年前に発行されていたのである。

かつては「永遠の生」への希望と信仰を与え、これを支えることは宗教の役割であった。しかし古い教義經典をそのままに説く伝統宗教の説得力は、到底、実証実験を根拠とした近代科学の唯物的思想に立ち向かえるものではない。

宗教を新たな商業と産業として取り組む新興宗教は別にして、知識人、若者たちの宗教離れは当然の成り行きであり、多くのキリスト教教会を擁したドイツ、英国、オランダにおいても、ここ10数年の間に、1000を超える教会が閉鎖されて、また他の目的の施設に転用されたという。

このような伝統的宗教の衰退の陰ではびこりだした

のが、キリスト教やイスラム教内部での「原理主義」であり、その突出たる「イスラム国」が世界の平和に新しい脅威になっていることは、今日我われが目にする通りである。

「死後生と来世」を信じつつも、“72人の処女と、酔うことのない美酒と饗宴の生活を与えられる名誉と褒賞”を信じる、イスラム青年の自爆テロであるが、この世においても低次元に属する、この様な浅薄な快楽を対価とする自爆テロが、真実の霊界の求めるところであるはずはない。

かつてはわが国日本にも存在した「神国日本」の思想が、“悠久の大義”という架空の褒賞によって、どれだけ多くの青年たちを特攻隊に駆り立てたか、それは危うくその一人を志した、筆者自身の感慨でもある。

“わが故郷”，“わが祖国”の詩的響きは美しいが、それが高じて、やがて近隣諸国を“不倶戴天の敵”，“膺懲の国”と化す。世界には民族の数、部族の数だけの「神」が存在するが、その各々が好みの「神の名のもとに」戦争と殺戮を続けた。それが人類の歴史であったが、その様な人類の創造を悔いる神の悔恨は、ノアの洪水をはじめ多くの神話の記すところである。

それは“民族と国家と宗教との癒着”という、人類が生んだ最大の過誤であり、いまでも人類に災い続ける不幸の温床である。愛という最も「拡散の原理」と、民族・国家という最も「求心的原理」の両立する訳がないからである。

(6)

さて、「魂の永生」や「彼岸の生」への希望と信仰を、ひとから奪ったものが近代科学の唯物思想であることは上に述べた通りである。すなわち、60兆個の細胞から成る人間の生体は、物質の一つであるタンパク質の合成物であり、生体の死により肉体はタンパク質の腐敗分解とともに消滅し、そして無になる。

また「心」と呼ばれる、意識、精神、思考、記憶なども、すべて脳内現象に還元され、大脳を離れては、その存在も働きもなく、これもまた死によって、脳細胞の腐敗分解とともに無に帰する云々……。この聞き慣らされた唯物科学的な主張に抵抗して、実験実証の対象外にある魂の不死や彼岸の生が、生き残る余地はないと言うのが一般の見解であるが、本当であろうか。

それでは一方、人類の長い歴史においては、時代と民族と地域、貧富を問わず、膨大な数の「幽霊現象」、

「心霊現象」、

「霊界通信」と称される類いのものには、古代エジプトやチベットの『死者の書』をはじめ、プラトンの『国家篇』に登場する兵士エルの物語、『新約聖書』、ダンテの『神曲』、スエーデンボルグの『霊界通信』など数多くある。

また19世紀半ば、唯物科学の蔓延する一方において、1848年に米国で起きたフォックス姉妹による「ハイズビル事件」を契機に、「近代スピリチュアリズム」と呼ばれる思想運動が起こり、アラン・カルデックの『霊の書』(1856)、モーゼスの『霊訓』(1883)、カミンズの『不滅への道』(1932)、シルバー・バーチの『霊言』などの、霊界事情を伝える書物が相次いで出版された。

またその流れの中で、英国では1882年に、上述の「心霊科学研究協会」が誕生、バルクソンはじめ、ノーベル物理学受賞者のオリバー・ロジックやウイリアム・クルックス卿、キュリー夫妻、作家のコナン・ドイルなど錚々たる科学者、哲学者、宗教学者、文化人がその会員に名を連ね、多くの実験会や降霊会などが催され、真剣に心霊現象の研究に関わった。

中でも博物学者で進化論でダーウインのライバルでもあったアルフレッド・ウォーレスは、終生にわたり心霊主義の熱心な支持者であり、「それは今までのいかなる宗教や哲学にもまして強力かつ効果的に、人間の道徳律を示唆するものである」と主張した。しかし世の趨勢は、これらすべてを詐術、虚言、妄想との理由で、その事実の十分な検討もなしに無視し続け、心霊研究に大きな進展がみられることはなかった。

唯物的な物質科学を基準とすれば、人間死後の存続や霊界について、合理的証拠を示すことは困難である。しかし、死後の人間が完全な無に帰するものとすれば、何故かくも多くの、時代と民族を超えた証言が記録され、報告されるのか。しかも注目すべきことは、それらの情報内容が時代を超え、民族を超えておおよそ共通していることである。時代も民族も異にする彼らの霊言内容が、霊媒たちの予め打ち合わせによって捏造された「物語の台本」によるとするならば論外であるが、それらの“頑固な事実”(アルフレッド・ウォーレス)をどのように説明すべきなのか、依然問題は残るのである。

(7)

この様に一旦は近代の唯物科学思想により駆逐されたかに見える「死後生」問題であるが、20世紀後半になり、意外にもこれに疑問をさしはさむ証言や知見が、しかも同じ科学者である心理学者、臨床医師、大脳生理学者などから次々と提出されることになった。それらは、救急医療技術や蘇生術などの医療技術の進歩によってもたらされたものである。すなわち臨床的に「死」と認められた脳死状態にあった患者が蘇生してその間の体験を口にする、いわゆる「臨死体験」と呼ばれるケースの急増である。因みにその数は1982年の時点で米国だけでも800万人に及ぶと言われる。

それらの臨床例を纏めた、精神医学者のキューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』(1969)やレイモンド・ムーデイの『かいま見た死後の世界』(1975)を皮切りに、多くの同種類の著作が次々に刊行され、また一方、霊の転生についても、膨大な証言の中から「生れ変り」と確実視される20例を選んだ、イアン・ステューヴンソンの『前世を記憶する子供たち』(1987)が大きな反響を呼んだ。

その後世界各国の臨床医や心理学者などによる、同様な報告が相次ぎ、わが国においても、立花隆の『臨死体験』(2001)や、世界的に著名な脳神経外科医師であるエベン・アレグザンダー医師自身による臨死体験記『ブルー・オブ・ヘヴン』(2013)、その他、臨床医師の矢作直樹による『人は死なない』(2012)などの公刊が続き、話題を呼んだことは記憶に新しい。

これらは、現代の死後世界体験記というべきものであるが、その報告の内容にも多くの共通したものがある。死期の近い患者が目にする、いわゆる「お迎え現象」から、体が浮上してベッドで寝ている自分の周りで、医師や看護婦が慌しく処置をする姿を見る、そして暗いトンネルを抜けたところでの光の生命との出会い。美しいお花畑、川の流れ。そして先に亡くなった家族や親しい人々との再会、指導霊との出会い、生涯の回顧フラッシュバック等々・・・。

そこに述べられる霊界の姿は美しく平和で楽園そのもの、互いに親和性、親近感をもつもの同士がグループをなし、それぞれが生前に地上で培った知性と徳性に相応しい界層に住むという。そこで評価されることは、ただ一様に生前の「愛と献身と奉仕」である。我われ人間は精神の修養と霊性の鍛錬のためにこそ現世

に生まれるのであり、人に具わる知識や欲望や各種能力は、学問や芸術や政治経済に欠かせないものではあるが、それらの多くは、霊性向上の手段ではあれ、目的ではない。それは現代の地上一般の価値観と大きく異なるところであるが、もし人が死後生をもち、霊界に再生することを知らなければ、当然のことである。

今、臨死体験者の現世への再帰還が急増することの意味は、あるいはこの価値観の再認識の喚起にあり、そのメッセージ伝達役としてではないであろうか。それによって、ニヒリズム猖獗を極める今日の世界に、人々を虚無の快樂や歓楽から救いだし、真なる「歓喜の死後生」の確信に導こうとするものではないだろうか。とすれば、その意義は計り知れなく大きいものがある。臨死体験者の多くが、もはや死を恐れることなく、生還後は一様に愛と献身の心に目覚めると言われるのも十分に納得がゆくことである。

(8)

しかし議論を戻して、近代の唯物科学の立場にある限り、霊や魂の存在に関する研究は、医学や臨床心理学の研究対象にはならない。しかし一方、同じ臨床医や心理学者による、実証的研究による科学的根拠を有する、有意な情報と証言があるのも事実である。これを単なる。“科学常識の埒外にある”だけの理由で、その研究に背を向けることは、科学は自ら進歩を放棄したに等しく、その様な科学に、いまだに「天動説」を主張するカトリック教会を嗤う資格があるであろうか。科学的真理自体が相対的であることは、何より科学自身の進歩が証明する所である。

では科学者たちが頑固に心霊問題への関与を忌避する理由は何なのか。人類は科学的知識欲に駆られて、膨大な予算を投じて月面に到達し、太陽系宇宙の果てにまで探査機を送り、その情報収集に精力を傾ける。しかし一方、人間万人に関わる「死後生の有無」、「霊界の探査」などに関しては、なぜかくも冷淡で無関心であるのか。

要約すれば、それはまず両者の身体観の相違に帰する。すなわち近代唯物科学は人間を、死によって無に帰する物質的な「肉体」のみと考えるのに対して、スピリチュアリズムでは、人間は「肉体」とともに、「幽体」と「霊体」から成ると考える。死によって肉体は滅するが、幽体と霊体は肉体から分離し、知的、道徳的に生前の知能や記憶や情念共々に、霊界に移行して存続し、更なる知的、道徳的進化の向上に努める

と考えるのである。

しかし幽体、霊体に関しては、肉体のごとく物理・生物学的な検証対象とはなり得ない。「霊体」なるものが、いかに個人諸々の「体験」、すなわち、幽体離脱や臨死体験、テレパシー、透視、予知、シンクロニステイなどの超常現象、心霊現象の体験等によって、その存在の裏付けを求めようとも、所詮、仮説の主張を出でぬことになる。ここに、両者の決定的相違があり、議論の閉塞がある。しかしそれらの体験は、常識的な科学的実証の対象にはならないとしても、体験者本人にとっては、疑い得ない事実であり、肉体にその対応機能が備わっていない以上は、これを幽体ないし霊体に帰することは、一つの合理性をもつはずであり、人が生前においてすでに「霊体レベルの生」を営んでいることの証しでもあると言えるが、さてこのことをどのように認識するかである。

(9)

この様な中で、2014年1月、ある注目すべき報道がなされた。それはNHKスペシャルが、『超常現象—科学者たちの挑戦』と題する、NHK取材班による特集を放映、その後同名の書物としても刊行されたことである。

その内容は、心霊現象、幽霊現象、臨死体験、生れ変りの証言やテレパシーや「虫の知らせ」まで、俗に「超常現象」と呼ばれる諸々の現象を、科学的に検証する研究者たちを、NHK取材班が取材したものである。これはすでに欧米では一部先端科学者たちが、20世紀後半ごろから取り組んでいた研究の後追いに過ぎないが、わが国では珍しい紹介であった。

その中で特に注目すべきことは、これら一連の超常現象の解明に、意外にも「量子物理学」が重要なキーワードになっていることである。量子論によれば、世界をつくる究極的単位は素粒子であるが、その素粒子は、「粒子」であり「波動」でもあるという二面性を持つ特徴がある。(最新の研究では、粒子性よりも波動性の方が、本質的であるとされるが。)さらに時間空間に制約されない「非局在性」という性格と、さらに、「量子もつれ」(quantum entanglement)と呼ばれ、“ひと度関係を有した2つの素粒子”は、以後いかに遠く何千キロ、何億キロから光年単位の距離に離されようとも、その関係を永久に保ち、その一方の観測結果が、瞬時に他方に影響を与えるという「遠隔伝達現象」を維持するという事実である。それは物理現象を

超えて、恰も人が「愛」と呼ぶものの原型を見るかのようではないか。

さらに量子論の説く量子は、従来の原子、分子、電子などの物質的な不活性な単位ではなく、常に可能なる選択肢の中で、他の量子の選択した状態に対して相補的な状態をとる、社会的選択性のある作用単位である、といわれる。

一方、唯物的な大脳生理学によれば、我われが精神活動と呼ぶ知性や意識や感情や記憶などすべては、高度に進化した大脳内のシナプスとニューロンの複雑なネットワークの所産であり、死とともに消滅するものと考えられる。

しかし、知識や記憶や予測や推量などの精神活動は、ひとり人間の脳に限られたことではない。すべてのものが進化に応じた「知る」、「記憶する」、「予知する」などの能力を持つのである。植物が太陽の方を向き、花が春に咲き、鳥が冬に南に飛び、鮭が確実に故郷の河に帰り、動物がその冬の雪の多少を「予測して」巣をつくり、布や金属が「形状記憶」をする。ペットが主人の帰宅時間を知り、自宅におかれた観葉植物が、外出中の主人の一日中の心理状態に同調を示すなど、これらは全て、広くは「量子もつれ」のなせる業、と言えるのかもしれない。量子論に解明を期待する超常現象は枚挙に暇がないのである。

さて、この様な量子理論が超常現象のいくつかの解明に有効な解を提供するとして、心霊現象、霊魂不死や霊界などに関してはどうであろうか。この研究は今後の更なる研究を待たねばならぬが、少なくとも唯物一方的なニュートン物理学の轡を解かれて、同じ科学の最先端にある量子論によって、両者の邂逅と解明の曙光を見たことは喜ばしきことである。

量子論は現在のところ、未知なる大陸に通ずる「秘密の抜け道」でしかないが、いつの日か、科学の「公道」となることがあるならば、その道は必ずや現世を出でて霊界に繋ぐ「希望の道」となることであろう。

(10)

さてそれでは、近代の唯物的思考から解放された魂の不死や霊界の問題について、新たなる量子論の立場からは、どの様なアプローチが可能であるか、量子論には全くの素人ながら、大まかながら素描を試みてみよう。

先ず宇宙を創るすべては、我われ人間を含めて、137億年前のビッグバンによって創出された素粒子によって成る。そしてその素粒子は「粒子」であるとともに「波動」でもあるという二重の性質をもつ。従って、人間が死による腐敗と分解によって、「粒子」組成の「肉体」の形姿を喪ったとしても、「波動」として働く「霊体」には、知識や意思や情念などの精神活動が記憶され、死後もその活動を続ける。何故ならば、我われが精神活動と呼ぶ思考や意思や願望や祈りなどの一連の「思念」の作用も、すべて「波動」として作用するものであり、霊界がすべて「思念のままに」動き、意思の交換をなすからである。

霊の不死・不滅性は、素粒子に由来するとすれば、「人は死なない」ではなく「人は死ねない」のである。

我われは日常、この見えない空間を、重力波、電磁波、光波などが飛び交っていることを知っている。テレビやラジオに用いられている極超短波、超短波、短波、中波、長波から、赤外線、紫外線、X線などは、すべて「波動」である。また、気体、液体、固体を問わず、すべての物質には、それ固有の周波数が備わっている。粗くランダムな波動は、触覚、聴覚、視覚、味覚などの日常感覚の対象として捉えられるが、精緻でより微細な波動は、五感を超えた第六感（シックスセンス）の直観や、瞑想など変性意識の対象となる。俗に言う「雰囲気」、「気配」、「空気」なども、この波動の庶民的表現と言ってよいであろう。

量子論的世界には、「物質」も「非物質」も存在しない。両者の区別は氷と水に例えられるか、異にして同一なものである。粗く鈍重であるか、繊細で軽やかであるかの違いはあれ、いずれも「波動」によって成る。

しかも波動は、物理的エネルギーを伴うものではなく、「情報」として働き、共役、共鳴、共振を伝播する。エネルギーは、その作用の伝播において大小、遠近を問わずランダムで、作用に選択の余地はないが、情報には、普遍的・均一的な情報なるものは存在せず、すべてが共役、共鳴に調音された場合にのみ、選択的、非局在的に応答するものである。すなわちエネルギーの伝達には、速度や空間の距離による減衰が不可避であるが、情報の伝播は非局在的、一瞬の遠隔伝達として成り立つ。

それら波動が実際に働いているとしても、耳に聞こえ目に見えるものではない。しかし、その波動に固有

の周波数を同調させれば、視聴覚の対象として音声化され、映像化もされ、美しい音楽や映像となる。霊を例えて“千の風”とする庶民の直観は、それなりに正しく、科学者が安易に霊の存在を否定するのは、視聴覚の対象ではない理由で、電波や波動の存在を否定するのと同じではないだろうか。

機器によらずとも、瞑想や打座による無我の境地、ヨガや法悦の舞踏、薬物が生む変性意識状態が、偶々の波長の同調をつくって、神秘体験や心霊現象を生むことを考えると、体験は常に思索や実験に先んじているようである。

霊界はまさしく“豊穡なる波動の海”であり、その点で量子理論と相性の良い関係にある。心靈論を「非科学的」と切り捨てる科学者は、ニュートン・デカルトの世界観の檻を脱せないでいるが、折角の“新しい科学”にパラダイムシフトさせてみてはどうであろう。心靈を巡る対立は、今や「科学対スピリチュアリズム」の対決であるよりも、偏狭なる唯物科学の無理解に対する、量子理論からの異議申し立てによる、“科学内対決”の様相を呈しつつある。

この様に現世と霊界も、これを隔てる境界はなく、「波動」の概念によって連続している。さりとて波動で成る霊界が、無機的で無味乾燥な物理色の世界であるかと言えば、さに非ず、その光の美しさ、自然や街並みや建物の美しさの筆舌に尽くし難いことは、多くの霊言が伝えているところである。

元来科学的に言えば、この世には「美しいバラの花」や「美しい虹」が実体として存在することはない。それは植物繊維の合成物であり、水滴の空中滞留に過ぎない。それを偶々見た観察者の眼に、偶々太陽の光が反射し分光して、両者を「美しさ」や「感動」の波動で繋いでいるのであり、美や感動はバラの中にも虹の中にも存在するものではない。あるのはその両者の関係の所産、波動の共鳴である。それを単なる光のスペクトルととるか、感動で受け止めるかは、その人の心次第である。

このように我われが現実に見る自然も、その中にあるすべての善悪、美醜も、突き詰めれば「波動」の所産であるが、その繊細な波動に受け応えるのは、肉体ではなく、非物質的、量子論的な霊体レベルの感覚である。

霊界における霊たちは、「親和力」によって、霊格や霊性の近いもの同士が「類魂」として結びつくと言われるが、それも各霊のもつ波動、波長の働きのなさ

しめる所で、現世に生きる人間同士にも俗にいう「波長の合う／合わない」関係があるがごときである。付言すれば、古代から伝統社会で言われる、気、オーラ、プラーナの類も、波動の一種と理解されるかもしれない。

この様に霊体、霊界の本質を量子論的波動で捉えることによって、スピリチュアル世界の視界は急速に拡がってくるが、後世は、この時代を回顧して「第三の科学革命の時代」と評するかも知れない。

(11)

さて、この様に「死後生」と「霊界実在」の科学的実証に曙光が射しはじめるとき、庶民の願いは、“霊界に生き続ける”愛する家族や親しい友人たちとの「交流と交信」であろう。

数十年前、百年前頃まで、地球の裏側の国に移住する人との別れは、永別にも近く、当時誰がその人々と、映像を伴った即時会話が可能になると考えたか。しかしこの間の科学技術の進歩は、「テレビ電話」なるものの発明によって、今日それを現実のものにしているが、霊界との交信・交流についても、誰が否定できるであろうか。

その場合前提となるのは当然、個人の死後生と、霊界の実在であるが、それに関しては、英国心霊科学協会の所蔵する膨大な資料だけで十分であろう。霊媒を介した霊界との音声や自動書記の交信はじめ、ノーベル物理学賞のオリバー・ロッジ博士自身が、戦死した子息との交信で得た数々の記録、ウイリアム・クルックス博士の、ケーティ・キング夫人なる霊との4年にもわたる降霊実験会での、全身物象化して登場したキング霊の写真40数枚や、血圧測定から指紋の採取の記録など、これらは近代国家における裁判証拠にも通用する、立派な物的証拠であり、これらの事実を無視して虚言か妄言扱いする理由は存しない。

科学技術による死者との交流を最初に試みたのは、若い妻を失ったトマス・エジソンであったが、成功には至らなかった。しかし彼の精神は受け継がれ、1950年代からは、テープレコーダーやラジオ、テレビ、電話、コンピューターなどの機器を媒介とした、ITC（電子機器によるトランスコミュニケーション）の実験が進み、霊の声や姿を偶然に、あるいは意図的に捉えた記録は膨大な数にのぼる。その実験の一部は、欧州全域で聴取される人気の高い「ラジオ・ルクセンブルク」

の公開実験でも放映された。

霊との特別な交信能力をもつ霊能者の脳波には、ガンマ波やシータ波が多く検出されるが、彼らや電子機器は、霊とどのような関係をもつのか。当然「波動論」の立場から、“未知なる波動”を予想するが、それ以上の議論に立ち入るべきではないだろう。重層するさらに上なる霊界には、その界層に独自の波動が働いているであろうし、それは人智の及ぶところではないからである。

しかしこの様な科学的な実験がいかに進歩しようとも、スピリチュアリズムへの反対姿勢に変化を及ぼすものではなく、それは100年後の今も変わらない。かつては霊媒のトリックや詐術などに、事寄せての反対ではあったが、真の理由はその様なところにあったのではない。その反対の主たる理由は、スピリチュアリズムが、学会、教会、経済界等に及ぼす、負の影響への危惧である。利権団体や伝統組織が怖れたのは、伝統的な現世的価値観の失墜と、既得利権の喪失に対する危機感であったろう。

すなわち、スピリチュアリズムの研究に従えば、歴史的キリスト教神学の教義や教会の儀式典礼をはじめ、諸々の伝統的組織や体制を覆しかねない革命的なものであり、その流布はキリスト教会のみならず、広く既存の社会組織には、容認しがたい出来事である。それが、かれらの「共同の敵」として危険視されたのも不思議ではない。それは「免罪符」を巡って争われた、往時のカトリック教会に対するマルチン・ルッターの宗教革命ほどの影響をもつからである。

当時のヨーロッパ社会は、キリスト教教会自体がイエスの愛と平和の教えを喚起、実行する力を喪失した因習的な惰性社会となり、それは2回に及ぶ悲惨な世界大戦を阻止できなかったことから明らかである。そのようなキリスト教に代わる「新しい啓示としてのスピリチュアリズム」の登場であった訳である。「天上のものは天上に、地上のものは地上に」戻されるべき時に、却って、新しい「地上対天上の闘い」となったことは皮肉なことである。

(12)

霊界の最高指導霊はイエスと言われる。(なぜ、モーゼでなく釈迦でなく、孔子でなくソクラテスでなく、モハメッドでないのか。その議論については、紙幅の関係から、他日に稿を改める。)

しかしその霊界には「キリスト教」はじめ、一切の宗教、宗派もなければ、儀式典礼もない。国境も民族や部族も国家、政府も、豪華な王宮や王座も、銀行も証券会社も、軍隊組織など、およそこの世の権威、権力、名誉、功績を表すものは一切存在しない。人は生前に積んだ、善悪、愛憎、我欲無私の道徳的実践によって計られ、それに相応しい霊界の位置を受けるだけである。受け入れ審査に肩書も履歴書も業績表も一切無用、というのが霊界である。

これが“天国”の実相であるが、この世の権威筋にとっては、誠に不都合なことであろう。彼らが、命を賭して求め、獲得し蓄えたものの一切が、この世だけの果敢ない「かげろふ的存在」に過ぎなかったことを思い知らされるのである。彼ら“世界の富豪80人”も、“駱駝の抜ける針の孔”の話を知っている筈であるが、それをどのように思い出すであろうか。少なくとも人は古来、その因果応報について、あらゆる機会に教え、諭されてきたはずであり、その褒賞も罪咎もすべて、自らが刈り取る以外にないのである。天国を選ぶか、地の富を選ぶか、最後のルーレットにやり直しはきかない。

かつてのローマ帝国も人々の物欲、金銭欲、権勢欲、名誉欲の上に繁栄を維持した。その価値観を根本から覆すときイエスの思想は、いかなる強力な軍隊よりも危険で、古代ローマ時代の長きにわたり、キリスト教徒が厳しい迫害を受けた理由である。

その後、世の趨勢を見計らったローマ帝国の皇帝たちは、帝国の国威と絶対的権威のために、これを「国教」として“利用する”ことを考えた。まず西暦313年のミラノ勅令により信仰の自由を認め、西暦325年、コンスタンチン皇帝の招集による第一回ニケーア公会議が開かれ、そこにおいて、福音書の改ざんや教義の恣意的な解釈が進められ、集まった1800人の司教の大多数の反対を抑えて、親皇帝派300人のみの“満場一致”で可決したのである。

そして西暦380年、テオドシウス皇帝による「国教化」によって、「キリスト教」なる宗教が誕生したが、それはイエスの教えを利用した、ローマ帝国の権威と神聖の擁護のための“御用宗教”であり、その結果が悪名高い「暗黒時代」の到来となったことは、歴史の示すとおりである。

この様に「キリスト教」は、その発足時点においてすでに、「イエスの教え」とは大きく乖離、相違して

おり、それが、19世紀のスピリチュアリズムとキリスト教会との反目に再現されたのも当然である。

その中でも、決定的な相違は、民族・国家と信仰との関係にあった。独りキリスト教のみならず、仏教、イスラム教、その他もろもろの宗教は、有史以来、幾多の戦争や紛争の原因をつくってきたが、その原因は、一に掛かって「民族の宗教、部族の宗教」どうしの衝突にあった。人類の歴史に見る戦争、紛争の主たる原因は、ユダヤ民族から始まり、神聖ローマ帝国、天子治国の古代中国や神国日本、そして現代の「イスラム国家」まで、宗教と国家の癒着であり、その凶暴性たるやホッブスの言う怪獣“リバイアサン”ごときではなく、その超克なくしては、絶対平和の確立は望みえないであろう。

ユダヤの民を「神の選民」としたユダヤ教に対する、イエスの新しい使命は、神を民族や国家から分離、解放することであった。その考えは、有名な“神のものは神に、カイザルのものはカイザルに”の言葉に示された通りであるが、後世の皇帝たちによる“神の私物化”は止まず、多くの戦争や紛争の原因をつくってきた。かのソクラテスでさえも、「都市国家アテネの市民」を脱しえずして、刑死に従うことになったが、その点では「宇宙市民^{コスモポリテース}」を自称した“無一物の酒樽の哲学者”ディオゲネスは、いち早く「国家」の愚昧、弊害を見抜いた男であり、彼こそは「国際連合」、「世界連邦」の先駆者であった。

カントは、国家・民族第一主義の18世紀さなか、それによる平和達成の不可能なるを見通し、『永遠平和のために』（1795）において「世界公民法に基づく世界共和国」の理念を掲げ、世人の失笑を買うが、世界大戦後の「国際連盟」、「国際連合」は、彼の理念を生かしたものである。

また、大戦後、アインシュタイン、シュバイツァー、湯川秀樹らが“人類と文化を救済する唯一の途”として提唱した「世界連邦政府」の構想も、民族国家の概念の解消と廃棄を目的としたものであったが、かかる構想自体を、一部勢力には“世界支配のための陰謀論”として忌避、排斥する向きもあり、実現には程遠いのが実情である。

伝えられる霊界には、霊たちの“親和力”によって結ばれるコミュニティはあるが、民族や部族、まして国家やその連合組織などは存在しない。霊界は“霊性の進化のための、個々人の愛と平和と善意の世界”であり、単純簡明にして平和、労すること、思い煩うこ

とのない世界、幼児や空の鳥、野の百合にこそ相応しい世界である。この世界を拒否して、人類はどこに向おうとするのであろうか。

人類存続の危機、“to be or not to be”の差し迫った選択のなかで、我われがスピリチュアリズム再考を促されている意味は極めて大きい、我われに残された時間は果たして、どれだけあるのであろうか。

(13)

人類が希望のミレニアムと期待した21世紀は、恐るべき“9.11事件”で幕を開け、それに続く10数年の間に、米国のアフガン攻撃からイラク戦争、それに連動した地域戦争が、余震のごとく新たな紛争と戦争を生んでいった。

2010年の「ジャスミン革命」に始まる「アラブの春」の民主化の流れによって、アフリカ、中近東諸国の独裁国家が次々に崩壊し、独裁者たちは歴史の舞台から退場した。そしてどうなったか。人々は待ち望んだ平和と自由と豊かな生活を手に入れたどころか、当事国の多くでは内戦と紛争が激化し、難民は溢れて国外に逃れ、それは移民先の国における更なる衝突と紛争の原因となり、テロの脅威の原因をつくっている。宗教は民族、部族ごとに骨肉の争いに明け暮れ、遂には「イスラム国家」のごとき究極のテロ国家の登場を招いたが、核兵器が小型化され、それがジハード戦士の自爆テロに用いられたらどうなるか。

今や9.11事件を機に始まった「戦争双六ゲーム」は“振りだしに戻る”を指示している。国連はもとより、多くの国家、民族と宗教の間に正常なる対話や調和の意欲が喪失し、「制御不能」のまま事態は、「人類破滅3分前！」の緊急警告を発している状態である。事実、プーチン大統領は最近のウクライナ問題で、核兵器を準備したことを明らかにしている。

これを収めるには、軍事力拡充や経済制裁など、いかなる「地上原理」の弄策をもってしても、到底収拾がつくものではない。終わりなき「^{すごろく}相対地獄」の中、人類は底なしの泥沼に引き込まれていく様相にあり、本稿がこれ以上の「地上原理」の弄策を断念して、彼方なる「天上原理」を呼び出したゆえんである。

それはかつて過去2度の世界大戦を前にしてパイパー女史が予言した、“地上世界の清浄と浄化”の悲劇を、3度と見ることなきを唯に祈るが故である。

さて、米国の優れた霊媒の一人パイパー女史は、第一次大戦前のある講演で「霊界から新しい啓示が示さ

れる前に、予め地上世界の清浄と浄化が必要であり、そのために世界各地で恐るべき戦乱が起こる」と予言し、それはほどなくして2度の世界大戦となって現実のものとなった。それから100年後の現代の状況は当時より、遙かに深刻であることは間違いないが、パイパー女史が今生きて現代の世界状況を目にしたら、どう言うのであろうか。

繰り返すが哲学の使命は、真の「全体真理」の探究にある。それは宇宙全体を貫き、人間の生と死と、現世と霊界とを結ぶ原理を見出すことであり、カントの不死と神の要請の理念もそこにあった。

しかしM.ウエーバーは、「人がこの世に生きる意味や目的は、哲学や学問科学などによって教えられるものではない、一切の地上の叡智を断念せよ」と、断言した。ところがその後、我われはベルクソンから心靈科学研究の必須論を聴いた。この二人の碩学の言葉を合わせ読むとき見えるのが、我われの今後の進むべき方向、すなわち、複雑煩瑣なる地上原理を棄てて、単純明快なる天上原理を心靈・霊界研究に求めよとの示唆である。

(14)

スピリチュアリズムの説く霊界の最高指導霊はイエスであると言われるが、その教えは「愛」に尽きる。その「愛」とは何か。ビッグバンに始まる、この超巨大な物理的世界のどこに「愛」の入り込む余地があるのか、その問いに答えを持ち合わせるものではない。

辛うじて言えることは、人間誰しもが喜び、祈り、感謝すること。それはまた何よりも神ご自身の御望みでもある（テサロニケ前書第五章）。しかし肉体レベルから見ると、それらは何の意味も益もない“不毛の行為”に過ぎないが、これこそは、万人共有の「霊体」レベルによる「愛」の行為なのである。聖書の説く「人はパンのみにて生きるにあらず」は、人が「パンによってのみ生きる肉体」の存在だけでないこと、「霊体レベルの生命」のあることを教え、そして霊体を育くむ糧が「愛」なることを示しているのである。

「宇宙においては万物が相互に結びついている」という量子理論の基本テーゼ、また“2つの素粒子が維持する永遠の結びつき”などは、宇宙万物の「愛」についての最高の物理学的表現である。それに較べると、キリスト教会の結婚式での台詞「死が二人を分かちまで・・・」は誤りと言わざるを得ない。霊体レベルで結

ばれた二人は、「死」によっても割かれるものではない。それは量子論とも、進化の「連続性の原理」とも相容れるものではないからである。

この様に、心霊科学や霊界論が示すものは、靈魂の不滅、永生の証しだけでなく、生と死の絶対的連続と、その“永遠なる進化”についてであり、そしてそのための現世での道徳的生き方、在り方である。

晩年のカントは『万物の終り』（1794）において述べている。「我われの行状を支配する善悪の原理は死後もその支配を続け、その原理が來世に変更される理由は全くない。永遠の生活においては、現在の道徳上の功績と罪科に応じ、その相応の応報を受けねばならぬ。それを考えると、我われが現世の生活を終える際の道徳的狀態が、來世に変わることなき様に行動すべきである」と。

現世がそれだけで終わるものではなく、死後の霊界における“永遠の進化の旅路”に備えるための、「予備修練の場」であることを示すこの簡潔なる文章は、スピリチュアリズムの骨子であるが、心霊科学の芽生えもなかった当時の、カントの洞察には驚きを禁じ得ない。

優れた霊媒のブリテン女史の言葉を借りれば、その目的は、「魂とは何か、何をなすべきかを問い、地上的な罪障を払い落して純白の衣装で魂を盛装するために、地上生活をいかに生きるべきか、これを学ぶことに尽きる」のである。

結び

最後に、この星の現状を振り返り、半世紀ほど前に見たある情景を思い出しつつ本稿を閉じることにする。

ドイツの南西部ロマンティック街道の起点に近い、中世の町ローテンブルグは、人口6千人ほどの小都市である。大戦により80%が破壊された町は、国内外の

支援を受けて、ほぼ普通の中世の面影を取り戻している。カトリック教の信仰に厚い土地柄から、各家の門壁には、住人それぞれの思いのこもった箴言や警句が掲げられ、興味を惹かれるが、その中の一つにこうあった。

この家は私の家である　しかし私のものではない
ただ借り与えられた時間は　永遠をもって計れば
ほんの短いひととき　さればこそこの時を用いて
全てのひとに心からの奉仕で仕えたい

Dies Haus ist mein und doch nicht mein,
ist nur geliehen für kurze Zeit gemessen
an der Ewigkeit. Drum will ich nützen
diese Spann und ehrlich dienen
Jedermann

この家を寫真に納め、箴言を書き写した青年時代から半世紀。折に触れて読み直してみる箴言の言葉は私には、万巻の經典にも勝る数行であるが、今その短い言葉に託する願いがある。それは、もしこの人間世界に入る「門」があるならば、その門壁の上にこそ、この箴言を刻印して掲げたいという願いである。

なぜならば、今その入り口に掲げられている言葉は、かのダンテの『神曲』における地獄門の入り口に記されている、あの忌まわしい句「すべての希望を棄てよ！」
Lasciate ogni speranza であるからである。

[後記]

本稿は、2014年2月に他界した妻・明子のへの追悼論文として書かれた。

長く筆者の研究の良き理解者であった彼女が、筆者の哲学の「最終課題」と示した遺志に応えた本稿を、ここに深き感謝と共に、そのみ霊に献げる。